



応援団似顔絵
『ライオンズニュース』(1957年10月25日号)



福岡市博物館

FUKUOKA CITY MUSEUM

常設展示室(部門別)解説

398

栄光の西鉄ライオンズ

平成24年4月3日(火)～平成24年6月3日(日)

部門別展示室 (1) 歴史展示室 (4) 考古・民俗展示室

はじめに

昭和二五年に日本プロ野球が二リーグ制になって、福岡では西鉄クリッパースと西日本パイレーツが誕生します。その翌年にこの両チームが合併して誕生したのが、西鉄ライオンズです。

このライオンズは、昭和三二年から三三年にかけて日本シリーズ三連覇という偉業をなしとげました。

熱狂的なファンに支えられた西鉄ライオンズを探ってみようと思います。



三原監督似顔絵『ライオンズニュース』(1957年10月25日号)

昭和三〇年(一九五五)頃の日本

昭和二〇年代後半の家電製品といえばラジオやトースター、アイロン、扇風機が中心でした。それが、同三〇年(一九五五)には、「神武景気」の波に乗り、電気洗濯機が急速に普及しはじめます。

さらに、登場した家電製品の月賦販売が庶民の購買意欲を刺激して、同三二・三三年頃の空前の家電ブームへとつながっていきます。中でも人気は、洗濯機、白黒テレビ、冷蔵庫に集まりました。この三製品は、「三種の神器」と呼ばれました。

昭和三三年(一九五八)には自動電気炊飯器がブームを呼び、掃除機やステレオなども登場しました。この後も「三種の神器」は次々と入れ代わり、昭和四〇年代になると、カラーテレビ、クーラー、カーからなる「3Cブーム」が到来することになります。

テレビによる生活革命

NHK放送文化研究所が昭和三〇年(一九五五)一月末におこなった調査によると、「二カ月の間にテレビをわざわざ見に行った人」は三〇％に達し、そのなかでプロレスを見た人が八〇・二％、野球三二・六％、相撲三五・四％、劇映画二二・四％、舞台中継二・五％でした。

このパーセンテージをみても、テレビ草創期には、大衆は主としてスポーツ中継番組をみており、それを促進させたのが街頭テレビや飲食店、喫茶店などの営業テレビでした。そして、NHKも民放もスポーツ中継に熱を入れ、野球やプロレスなどのスポーツ試合の中継を競いました。

一方民放は、スポンサーのためのCM内容を飛躍的に向上させます。ここに日本にはじめてCM文化という新しい大衆文化が生まれてくるようになります。

バックネットの上は新聞写真班 ↓



平和台球場(日本シリーズ)『ベースボールマガジン』(1954年12月号)

高度経済成長期の福岡

日本は、昭和三〇年代から昭和四八年(一九七三)の石油危機まで、未曾有の経済発展を遂げました。いわゆる高度経済成長期です。

この時期、福岡の街並みも大きく変わってきました。昭和三五年には天神ビル、翌三六年には福岡ビルが開業し、天神交差点の風景が一変しました。また、昭和三八年には博多駅が移転し、駅前も大きく変化しました。



豊田・島原選手『ベースボールマガジン』(1956年11月日号)

さらに、明治四三年(一九一〇)から市民の足として親しまれてきた路面電車が昭和四八年以降段階的に廃止されて、そのかわりに福岡市営地下鉄が開業しました。

また、米軍から昭和四七年(一九七二)には板付空軍基地(現福岡空港)、雁ノ巣飛行場、同五



街頭テレビの観衆(新天町)『ベースボールマガジン』(1956年11月号)

二年(一九七七)には米軍基地キャンブハカタ(現海の中道海浜公園付近)が返還され、福岡の戦後も終わったのかもしれない。

プロ野球ブーム始まる

昭和二十二年四月二十七日に八球団(阪神、巨人、阪急、近畿、中日、セネターズ、金星、太平)による一五回総あたりの長期ペナント・レースが開幕しました。天才バッター 大下弘や川上哲治、剛球別所毅彦などの活躍で人気を呼んだ。連合軍に接収されていた後楽園球場も使用許可になり、プロ野球は戦後の食糧難やインフレ・失業などに悩む庶民の間に急速にファンを広げていきました。

そして、プロ野球がセ・パ両リーグに分裂してからペナント・レースの折り返し点で、ファン投票でメンバーを選ぶオールスター戦が恒例となりました。ふだんは見られないリーグを異にする好投手と強打者の対決：それがドリームゲームとして人気を呼んだ。昭和二十六年七月に甲子園と後楽園でおこなわれた第一回は、観客動員は三日間で二三十万人を数えました。



日本シリーズ私設応援団「スポーツと映画」(1956年12月号)

西鉄ライオンズ

福岡県には、戦前から香椎、春日原、到津の三球場があり、それぞれ、博多湾鉄道汽船、九州鉄道、国鉄門司鉄道局が所有していました。

昭和十七年(一九四二)には博多湾鉄道汽船、九州鉄道など五社の合併によって設立された西日本鉄道は、昭和十八年にプロ野球チームである西鉄軍のオーナーとなりますが、同年シーズンオフには球団は解散しています。これが日本野球連盟が戦況悪化により活動を休止(昭和十九年)する以前であったため、戦後すぐに球団を復活させることはできませんでした。

昭和二十五年(一九五〇)に日本のプロ野球が2リーグ制になって、福岡で西鉄クリップスと西日本パイレーツが誕生します。その翌年にはこの両チームが合併して誕生したのが、西鉄ライオンズです。西鉄ライオンズは、昭和三二年(一九五七)から三三年(一九五八)にかけて日本シリーズ三連覇という偉業を成しとげました。

「もはや戦後ではない」(昭和三二年度版「経済白書」ということばに象徴される高度経済成長時代のスタート)が、福岡では西鉄ライオンズの黄金時代と重なっているのです。



ユニフォームロゴ(1958年)



西鉄ライオンズ球団旗 昭和30年(1955)頃



昭和31年日本シリーズ優勝パレード「ベースボールマガジン」(1956年12月号)

パリーグ優勝旗(昭和32年(1957) (西鉄(株)蔵)



日本シリーズ初制覇祝杯「ベースボールマガジン」(1956年11月号)



日本シリーズ初制覇祝勝会「ベースボールマガジン」(1956年11月号)



パリーグ優勝記念トロフィー 日本放送協会、昭和32年(1957) (西鉄(株)蔵)



日本シリーズ三連覇記念ブロンズ像 昭和33年(1958) (今泉京子氏蔵)



パリーグ優勝の瞬間「ベースボールマガジン」(1956年11月号)



パリーグ優勝記念杯 大洋漁業(株)昭和38年(1963) (西鉄(株)蔵)



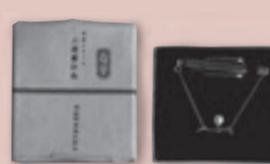
昭和29年11月3日 日本シリーズ第3戦



昭和29年11月3日 日本シリーズ第3戦



名刺入れ(パリーグ優勝記念) 昭和29年(1954) (今泉京子氏蔵)



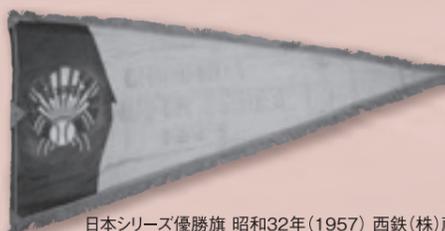
タイピン(日本シリーズ三連覇記念) 昭和33年(1958) (今泉京子氏蔵)



放送員バッヂ (日本シリーズ用) 昭和33年(1958) (今泉京子氏蔵)



ライオン像(西鉄(株)蔵)



日本シリーズ優勝旗 昭和32年(1957) 西鉄(株)蔵



結婚記念品(稲尾選手) 1960年1月10日(今泉京子氏蔵)



灰皿(平和合改装記念) 昭和33年(1958)



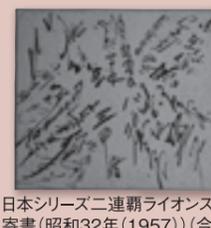
コップ(西鉄ライオンズ寄書) 昭和40年代(今泉京子氏蔵)



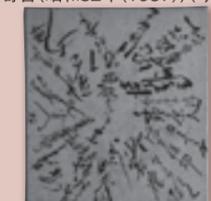
風呂敷(昭和43年(1968))



風呂敷(昭和31年(1956)) (今泉京子氏蔵)



日本シリーズ二連覇ライオンズ寄書(昭和32年(1957)) (今泉京子氏蔵)



西鉄クリップス寄書(昭和25年(1950)) (今泉京子氏蔵)



手拭い(日本シリーズ優勝記念) 1956-58

よみがえるヒーロー伝説

昭和二六年、パ・リーグの「西鉄クリッパース」とセ・リーグの「西日本パイレーツ」が合併して「西鉄ライオンズ」が誕生します。

監督は巨人から三原脩氏(監督在任…一九九五〜一九九九)をむかえます。九年間西鉄ライオンズを率いて、リーグ優勝四回、日本シリーズ優勝三回。今から五〇年ほど前のことです。



とくに、昭和三三年、西鉄ライオンズが日本シリーズ三連覇をかけた試合は、最初、巨人が三連勝し西鉄は絶体絶命の窮地に立たされたが、その後四連勝。三原監督の采配は「三原マジック」とよばれました。MVPに選ばれた稲尾和久投手は七戦中六戦に登板、後半戦で二六イニングを無失点に抑え、「神様、仏様、稲尾様」が流行語となりました。大下弘、関口清治、河野昭修、中西太、坂上惇、久保山誠、西村貞朗、高倉照幸、豊田泰光、仰木彬、滝内弥瑞生、和田博実、稲尾和久、畑隆幸、村山泰延、安部和春選手らを擁して黄金時代を築きます。

さて、今回は、日本シリーズ優勝関連品、西鉄ライオンズ名選手たちの愛用品の数々のほか、球団旗など数多くの関係品を展示致します。当時の感動を福岡市博物館で感じてください。(鳥巣京一)



サインボール(稲尾選手) 昭和32年(1957)(今泉京子氏蔵)



ユニフォーム(ノンプロ時代、昭和23(1948)年頃)西鉄(株)蔵



ユニフォーム(城戸選手、昭和30年代)



ユニフォーム(稲尾選手、昭和30年代)(庄野多香子氏蔵)



グラブ(中西太選手用)昭和30年代



『ライオンズ』昭和32-34年(1957-59)



『野球界』昭和30年代



ファンブック(1971、72年)



『旬刊ライオンズニュース』昭和33年(1958)



カード(西鉄ライオンズ)昭和30年代



仁丹野球ガム(西鉄ライオンズ)昭和30年代

「企画・写真協力」

西日本鉄道株式会社
久保田運動具店福岡支店
西鉄ライオンズOB会
NPO 西鉄ライオンズ研究会

「協力」

坂上惇 久保山誠 西村貞朗
高倉照幸 豊田泰光 滝内弥瑞生
畑隆幸 村山泰延 安部和春
今泉京子 庄野多香子 河野鈴子
吉富実 宮崎俊朗 安部和子 和田貴美子
江頭重利 内山純男 田北昌史
松永一成 土屋和之 秋山康幸

(主要参考文献)

毎日新聞社『決定版 昭和史』(第一四巻 第二五巻 一九八四年)
『野球界』(一九五〇〜一九六〇年発行の各号)

『ベースボールマガジン』(一九五二〜一九六〇年発行の各号)
河村英文『西鉄ライオンズ 最強軍団の内幕』(葦書房 一九七八年)
小野博人『ああ西鉄ライオンズ』(西日本新聞社 一九八三年)
豊田泰光『風雲録 西鉄ライオンズの栄光と終末』(葦書房 一九八五年)
中西太『西鉄ライオンズ最強の哲学』(ベースボールマガジン社 二〇〇七年)
益田啓一郎編『西鉄ライオンズとその時代』(海鳥社 二〇〇九年)

福岡市博物館 〒八二四一〇〇〇一
福岡市早良区百道浜三丁目一番一号
〇九二・八四五・五〇二